

精神主義の覚醒と《日本への回帰》

— 山路愛山と井上哲次郎 —

伊 藤 雄 志

一・序 説

本稿で取り上げる山路愛山と井上哲次郎が本格的に著作活動を開始した明治二〇年代は、明治維新以来の急速な文明開化に対する反動が現れた時期であつた。明治維新の結果、政府は積極的に欧米の制度や学問を取り入れる方針を打ち出し、旧来のものを捨て、欧米のものをすべて文明開化と見なす啓蒙運動が政府の主導の下で始まつた。しかし欧米の文明に追い付くことを目標とした啓蒙運動は、結果的には功利主義的物質主義的風潮を生み出し、明治二〇年代になるとその反動として多様な理想主義的精神主義的思想が台頭してきたのである。明治初期の文明開化による物質的進歩は著しいものがあつたが、思想上の混乱の中で、この時代の日本は、伝統的な儒教的理想主義に取って変わる確固とした精神的支柱を、まだ見出してゐなかつたのである。

山路と井上は、このような啓蒙運動に対する反動的思潮の中で活動し、それぞれのやり方で「普遍的な」人間の精神的支柱となるものを模索した。しかし明治二七年の日清戦争の勃発とそれに続く三

国干渉という一連の衝撃は、日本の知識人に「世界の中の日本」を厭が上にも意識させた。このような中で、彼等が實際的な「個別的な」日本人の精神的支柱の問題をも論じることになったのは当然であつた。啓蒙時代に影を潜めていた日本の過去は、単に捨て去られるべきものではなく、むしろ日本の将来を考える上で非常に重要なものとなつていた。しかし、日本人の精神的支柱として二人が描いた日本像は全く異なるものだった。井上が日本の伝統的思想に見られる日本国民の「個別性」を強調して、それを国民道德教育の中で生かそうとしたのに対し、山路は日本歴史を人間精神の「普遍性」によって理解しようとした。

井上の日本像は当時の政府の後押しもあつたため影響力があり、その後入れ代わり立ち現れた日本特殊論の原型とでも言えるものである。これに対し、山路の思想は、明治後期の「日本的伝統への回帰」が必ずしも閉ざされたものではなかつたことを示しているという点で興味深い。本稿では、山路と井上がどのように啓蒙時代の功利主義・物質主義を批判したのかという点を検討し、さらに山路がなぜ井上の思想と対決しながら、「個別的な」日本の歴史の中

に「普遍的な」人間精神を見出したかを明らかにしたい。

二、啓蒙期物質主義に対する反動

《山路愛山の人間精神論》

明治初期の啓蒙主義の時代に見られた功利主義・物質主義に対する不満を、最も明瞭に表明したのは若き徳富蘇峰であった。蘇峰は、明治の新世代の青年向けに雑誌「国民之友」を出版したが、山路愛山（一八六五—一九一七）は、この雑誌の中で述べられている徳富の主張に強く感動した若き読者の一人であった。山路は明治二三年に徳富と同様に、「物質的開化の建造と共に更に高尚なる精神的開化の建造に」努めなければならない、と述べている。物質主義に対する山路の不満は、彼の「明治文学史」（明治二六年）の中でより具体的に述べられている。この作品の中で、山路は、田口卯吉と福沢諭吉を優れた啓蒙思想家として称賛しながらも、彼らの物質主義的傾向を批判しているのである。

山路は、田口卯吉の「日本開化小史」に関して、その「最も優れたる所はその（日本の）思想発達と物質的の進歩とを觀察せし点に在り」と評価しながらも、彼の史論の大きな欠点は「人物に重きを置かざるることなり」と批判している。田口の史論は「余りに因果づくめなり、斯ふすれば斯ふなる者、斯る場合には、斯かる現象を生ずと予じめ人事を推断して、而して史を評する者」なのである。山路は田口が歴史の中で人物を無視していないことを認めているが、「不幸にして田口君の著す所の人物は平凡の人物なり、彼の筆は英雄を写し出す能はざる也、彼は人物に向つて同感の情少なき也。」

と批判している。人物論は「論理学」によって為すことは出来ず、「直感」「同感」「詩人的の識認」が必要だというのである。⁽³⁾

山路はまた啓蒙時代のベストセラー「学問の勧め」を書いた福沢諭吉を「明治文学史上の巨人」と見なしている。しかし山路によれば、福沢の天職は「伶俐なる商人を作り、敏捷なる官吏を作り、寛厚にして利に聴き地主を造る」ことにあったのである。このような実際の教養は、古い精神を留めていた明治初年には「開化党」に大いに歓迎されたのであった。しかしながら、山路は福沢が単なる「党派の首領」に過ぎず、日本国民が求める指導者ではないと見なした。なぜなら福沢の後継者は、「唯生活を善くするの一事を以てその最終の目的となすこと」が多いからである。しかし山路によれば、「人は唯善く生活するを以て満足する者に非ず、人の心の深き所には温飽に満足せざるものを有す、是故に世は宗教を要す、是故に世は哲学を要す」るのである。福沢はこのような宗教、哲学を教えなかったゆえに「国民の大師」となりえなかったと山路は主張したのである。⁽⁴⁾

人間の存在には物質的側面だけでなく精神的側面が重要であるという山路の考えは、明治中期に流行した進化論の物質主義的解釈に対する彼の批判の中にも反映されている。当時の多くの知識人がそうであったように、山路は進化論を信じており、「世界は常に進歩するものなり。優勝劣敗なる進化の大法は偏在なり。」と述べている。また、すべての生物は生存競争を通して進化し、人間社会の発展は適者生存の原理に一致している、というチャールズ・ダーウィンの進化論を山路は支持している。また「現代日本教会史論」（明

治三九年)の中で彼は、明治二三、四年頃以降東京大学の教授によって主張された進化論やハーバード・スペンサーの不可知論が、静岡の青年会の討論会でさえ話題になるほど広く日本の思想界に影響を与えたと述べている。しかしながら、山路は、東京大学派の学説が「遂に人心に真個の満足」を与えなかったと回想している。なぜなら、その主張が「人間の知り得べきものは現象のみ」であり、「万物それ自身は不可知的」であり、「万物の本源もまた不可知的」だと言ふようなものであったからである。

明治四一年に発表した「生命哲学」の中で、山路は人間は「智慧」のほかに「生命」を持っていると主張した。人間の「智慧」は、万物を理解することは出来ないと言ふことを納得しても、人間の「生命」は、「万物解すべからず。人の生涯は無限の如きものなり。人は唯知るべからず。説くべからざる暗黒の中に煩悶して死するものなり」と言ふような解答に満足出来ないのである。科学の発達だけでは、宇宙・人生の不可思議さに関する疑問を解決することは出来ず、「人心は光明を失ひ、希望を奪はれ、煩悶して次第に生氣を枯らし」てしまう。人間は、生命存続のために食物を求めるだけでなく、宇宙万有の解釈をも求めるのだと山路は主張していたのである。また彼は宇宙万有の謎に対する普遍的解答があり得るとも指摘した。人間の心は、「古今東西同一のもの」であり、「人心既に一なれば宇宙万有の説明も帰一致すべき筈」と山路は考えたのである。つまり彼によれば、宇宙・人生の問題は普遍的に理解されうる言葉で説明可能であったのである。この人間の普遍的な内部的生命の強調は、次に検討する井上哲次郎の哲学の中には見られないものである。

った。また山路の「普遍的」人間精神への確信は、これから論ずるように、井上の「個別的」な国家主義に対する批判の基礎となったのである。

《井上哲次郎の哲学的宗教論》

山路愛山は、帝国大学教授井上哲次郎(一八五六―一九四四)を当時の日本の代表的知識人と見なしていたが、井上もまた、山路と同様に、啓蒙期の学者に見られた物質主義的世界観を批判した。「明治哲学界の回想」の中で、井上は「自分は理想主義の側に立って絶えず唯物主義、功利主義、機械主義の主張者とたたかっていた」と述べている。そして「もっとも激しくたたかっていた相手は加藤弘之博士」だったと回想している。

帝国大学の教授の中でも、大学総長加藤弘之は、福沢諭吉とともに啓蒙期を代表する学者の一人であり、進化論を擁護して迷信や不合理な考え方をなくすために努力を払ったことで知られている。井上が東京大学哲学科の学生であった頃、大学では、モース、フェノロサらのお雇い教師や加藤弘之、外山正一らによって進化論が盛んに広められていた。井上が帝国大学教授に就任した明治二三年に発表された「博物学と歴史学」という論文の中で、加藤は、他の動物と同様に、人類もまた自然の力に支配され、自由意志や目的論の入る余地はないと主張し、進化論を基礎にした物質主義的世界観を説明している。井上は東京大学において、自分が影響を受けたものの一つとして進化論をあげているが、「進化論者はとかく唯物的方面に傾向する」と批判している。彼は加藤を「極端な唯物論者」と見なし、「自分も加藤博士と同じく進化論者ではあったけれど、どう

しても唯物主義に走ることはできなかった」と回想している。なぜなら「多くの進化論者は、自然科学的の進化論をもって満足して、とかく物質主義に傾向するけれど、それには自分はあきたらない感じを抱い」たからであつた。そして「どうしても哲学的方面から見た精神的進化主義をとるんでなければ、はなはだ偏した不完全な進化論となる」と井上は考えたのである。

井上は啓蒙主義の物質主義的傾向を批判するだけでなく、彼自身の新たな思想を構築しようとしていた。「日本民族思潮の傾向」(明治三二年)の中で、井上は、加藤弘之と福沢諭吉を旧世代の代表的思想家と見なし、彼らの経験主義的實際主義的考え方は日本思想の古くからの伝統に由来していると指摘している。そして国家はその固有の思想を基礎として発展するのであるから、このような先祖の伝統に従うのは良いことだ、と井上は考えた。しかしながら、この経験主義的實際主義的考え方のほかに、精神主義がもう一つの日本の伝統思想であり、この二種の思潮を「融合調和して、一種新規の哲学を胚胎」しなければならぬと彼は主張した⁽¹⁸⁾。

明治三年に山路愛山は、「今や我日本の人心は懷疑に飽き」、「功利教の満足すべからざるを知」つたため、「井上哲次郎氏すらも諸宗教を合金して新信条を建つべき時期なることを暗示せり。」と述べている。山路は、功利主義的風潮に対する反動として、「哲学と宗教の再び我國民の中に復活し来るべきを」信じたのである⁽¹⁹⁾。また明治三四年に信濃教育会総会で、井上は「人生の話」という題の演説を行い、「人類の生きて世にある目的は何ぞや」という問題を論じたが、その当時長野の「信濃毎日新聞」の主筆であつた山路はこ

の公開講演に出席し、後日「博士井上哲次郎氏の演説を評す」を書き、その中で、井上が人生における「不朽なるもの」を求めた点を高く評価している。しかしながら、井上のように、宇宙の神秘、人生の目的を科学と論理学のみによって論ずるのは誤りだと山路は主張した。なぜならそのような問題は知識の問題ではなく信仰の問題だからであつた。ただ「少量にして傲慢なる小哲学者」だけが「余は宇宙の秘密を解き得たり」と誇らしげに言うが、実は人々は「哲学を輕蔑し哲学者の信条を蹂躪して自己の中に存する要求を満たさんとしつゝある」と山路は批判している⁽²⁰⁾。

更に山路は、明治三六年に雑誌「独立評論」を創刊した時、その「発刊の趣旨」の中で、「帝国大学の哲学者」を公平に論じ、哲学と宗教に特別の注意を払いたいと主張している。實際彼は「独立評論」の中で、帝国大学教授井上哲次郎の思想に何度も触れ、また諸宗教を統合して新宗教を創るべきだという彼の論文の要旨をそこに掲載した。また「独立評論」の第三号の論文の中で山路は「井上哲次郎氏が総ての歴史的宗教を以て信ずるに足らずとし別に一種の宗教を創立せんとするを壮とす」と称賛しているが、同時に「苟も我心にして満足すべくんば何ぞ新たに一教を設くることを要せん」とも述べている⁽²¹⁾。

山路と井上が活動を始めた明治二・三〇年代を回想して、島崎藤村は次のように述べている。

「わが国における一九世紀の末と言へば実に思潮の入り乱れた時であつた。一切のものが統一を欲して叫びを擧げていた。……極端な欧化主義、それに対する国粹保存の声、それらの激しい争いが

次第に沈ま行つて、東西のものの調和ということがさかんに唱えられるようになった。そうした調和的思想が一切の学問や芸術の世界を支配していたと言つてもいい。²³⁾

このような「東西のものの調和」の試みに対して、島崎は、「どうして東からも西からも芸術の精華を集めて来て、幾多の性質を異にし生立ちを異にした天才の作ったものを一つの渦中に溶和するなどということが出来ようか」と疑い、「自分ら青年はもつと直接に分らの内部に芽ぐんで来るものを重んじ育てなければならぬ」と考えた」と回顧している。井上が構想した東西宗教の統合による新宗教の創造の試みは、まさしく島崎が指摘した類いのものだと思われる。島崎が「東西のものの調和」を疑つたのと同様に、山路は井上の唱える折衷的に創造された新宗教では真に人間の心を満足させることは出来ないと考えていたのである。

三、煩悶青年と国家主義教育

諸宗教を融合調和して「普遍的」新宗教を作るべきだと論じていた井上哲次郎は、他方で明治三〇年に高山樗牛らと大日本協会を起こして、機関紙「日本主義」を発刊、「個別的」国民の特性と建国の精神に由来する国民的実行道德の原理を説いた。井上が創造しようとした新宗教は「日本主義と衝突すること」はなく、「日本主義は日本国民の一分子として取るべき方針、宗教は世界の一分子として取るべき方針」であつた。²⁴⁾ また井上は明治哲学界を回顧して、「明治以来、倫理を講ずるものがややもすれば一般的普遍的の方面のみに着眼して、特殊的差別的方面を度外視するの傾向あるは、実践道

徳の上から見てはなはだその当を得ざるものである。」と述べている。そこで井上は「国民道德を力説することになった」というのである。井上は、国民道德のことを言う者は明治の初年かいたが、これを「一箇の学として講じなければならぬようになったのは、明治の末年から」であり、「それには自分が主として関係した」と回想している。実際、明治四三年の幸徳秋水らの大逆事件をきっかけに、文部省は「我国固有の国民道德」の普及に乗り出し、内務省は井上哲次郎を国民道德運動の指導者に任命し、やがて井上は「国民道德概論」(明治四五年)を出版したのである。

しかしながら、井上は早くから政府に接近し、「個別的」国民道德の問題にかかわつていた。急速な文明開化に伴つて生じた青年の精神的混乱を抑えるために、明治二三年に文部省は教育勅語を發布し、翌年にはドイツ留学から帰国したばかりの井上に教育勅語の解説を書くことを要請した。この「勅語衍義」の中で井上は、学校で教えられるべき忠君愛国思想の合理的根拠を明らかにしようとして試みた。その後彼は「宗教と教育の衝突」(明治二六年)を出版し、その中で国家主義に反するという理由でキリスト教を攻撃したことはよく知られている。その時山路愛山は、国家の繁栄のために献身することが人生の目的であるとする井上の「極端なる国家主義」を厳しく批判していた。²⁵⁾

井上の国家主義教育に対する山路の批判は十年後に「煩悶青年」の自殺事件によつて再燃した。明治三六年五月二二日に第一高等学校の生徒であつた藤村操が人生の意味を問いつめた末に、書置きを残して日光の華厳の滝で投身自殺をした。この事件が報道されると、

たちまち人生問題が言論界の話題となった。藤村自殺の直後に井上の論説「青年の精神上の危機」を自分が主宰する「独立評論」に掲載したことは、井上の発言に対する山路の並々ならぬ関心を示唆している。その論説の中で井上は、青年が人生の哲学上の問題や宇宙の神秘に遭遇し、精神的煩悶を体験した時には、かかる人生の問題を論じた偉大な哲学者の著作を勉強するのがよいと主張した³⁰。

（山路自身もまた「独立評論」（明治三十九年）の中で、井上とはまったく異なる立場から、青年の煩悶問題を論じている。山路は文部省の国家主義教育こそが煩悶青年を生み出してしまったと考えた。

「日本固有の忠孝」を説く国家主義教育は、「触れるべからざる信仰の問題」に干渉しようとしたが故に、「始には偽善者を生じ、後には謀反人を生じ。遂に潰裂崩壊して收拾すべからざるに至らん」としているのである。文部省の教育を受けた青年の心は「次第に矯激に馳せ、次第に煩悶に陥」ってしまったのである。更に山路は、同じ明治三十九年に「教育論」の中で、文部省の「注入主義教育」を批判して、「頭から国家の威光、政府の命令にて忠良なる臣民を作らんとしたりとて、それが成らぬは当然なり。」と述べている。少年が年頃になって煩悶を始めた時、学校の先生がそれに頓着せず、ただ国家を愛せよと説教しても何も解決出来ない。むしろ少年を「誘導してその宗教的、哲学的要求を満足せしむる工夫をなすべきだ」というのが山路の主張であった³¹。

すでに見たように井上哲次郎は、「普遍的」新宗教の創造を目指す理想主義的立場を取っていたが、現実の問題においては「個別的」日本主義を唱え、実際の国民道徳を主張したのである。この様に

井上が「昔の態度を一変した」のは井上が「昨非を覚りたるもの」、つまり自分が求めていた折衷的宗教が偽物であったことに気付いたものだと言はれ受け取った。一方、井上自身は「国民道徳は理想主義であるか功利主義であるかといえ、利用厚生と云う程度において功利主義と矛盾しないけれども、そこにとどまらないではあるかにそれを突破して向上するものであるからむしろ理想主義である」と述べて、自分を中心となった国民道徳の主張を弁解している³²。井上は、彼の思想が「普遍的」宗教と「個別的」国民道徳という二重構造を持っていることを自覚していたが、それらの統合を彼の学問的課題として残したまま、「個別的」国民道徳を強調したのである³³。

四、二つの《日本への回帰》

井上哲次郎の国家主義の背景にあった日本国民性論の萌芽は彼の修業時代にすでに見られた。彼は留学先のドイツで書いた「内地雑居論」（明治二十年）の中ですでに「人種」の概念に強く捕われていたことが認められる。外国人との内地雑居に反対した井上は、スベンサーの「劣等人種が優等人種と雑居する時は、優等人種に圧倒される」という進化学説を理論的根拠にした。つまり日本人は知識においても、金力においても、体格においても、その他あらゆる点で西洋人に劣るので、今すぐに外国人の内地雑居が許されたならば、日本人が競争に負けてしまうのは必然である。従って、日本人が将来対等に欧米人と競争出来るようになるまで、外国人との接触を避けるべきだと井上は主張した³⁴。この様に、彼にとって外国人は日本の安全に対する脅威と考えられ、国家を超える普遍的な「人類」と

いう概念はこの時すでになかったのである。³⁶⁾

これとは対照的に、山路愛山の思想の根底には、古今東西にわたって普遍的な人間性があるという確信が始めからあった。明治二五年に「国民新聞」に掲載された山路の論説「今猶古の如し、彼猶此の如し」は、その表題が示しているように、「人類は同一」であるという彼の思想の端的な表明であった。³⁷⁾人間の普遍性に対する山路の確信は、彼の「大同論」（明治三八年）の中で更に展開されている。山路によれば、人間は外観だけ見れば非常に異なっているが、外観の相違は皮三寸の事のみで内部に立ち入ってよく観察すれば、何も違いがないことが分かる。外国人を差別の眼で以て見るのではなく、古今東西を貫く一定の道理があることに注意すべきである。例えば、日本人が支那人を見て「不思議なる異人」と思っている間は、支那人を理解することは出来ないし、彼らの良友にもなれない、と山路は指摘している。³⁸⁾

大正元年の「国民雑誌」（「独立評論」の改名）掲載された「日本人可解論」もまた山路の国民性論への関心を反映している。この記事は新聞記者ジョージ・ケナンがアメリカで発表した「我々は日本人を了解出来るか」という題の論文紹介である。ケナンによれば、如何なる国民、如何なる人種でも多少理解し難い面があるが、人類には根本的な共通点がある。異なる風俗、習慣、社会組織の背後には同一の人間性が隠れている。つまり日本人の風俗と祖先伝来の教育は西洋人のそれとは違いますが、日本人は決して不可解というわけではないのである。³⁹⁾

以上のように人間の普遍性に着目していた山路にとって、日本国

民の特性を強調する観点は受け容れ難かったのは当然であった。例えば、山路は、水戸学が近世の日本史学を開いたことを評価しながらも、それが「国体人情の差別に注意すること」が多く、その「同一に注意すること」が少なくと批判している。古今東西を区別して、恰かも「感情を殊にする別世界の観を為す」ならば、古今東西を貫く国家盛衰の原理、人事興亡の法則を見抜くことは出来ないと考えたのである。水戸学の伝統は、井上哲次郎の著書「日本古学派の哲学」（明治三五年）の中に受け継がれており、山路はこれを「独立評論」の第一号で批判的に論評している。⁴¹⁾この本の中で、井上は、古学派の活動主義や赤穂義士の武士道精神は日本民族特有の精神であると主張したが、山路はこのような主張が十分な歴史的考証に基づいていないと指摘した。

日本人の国民性の問題は明治末期に、多くの知識人が取り上げたため、言論界の大きな話題となった。明治四十一年の「独立評論」の「思潮」欄によれば、国民性に関する思想が「今や諸方面に潜在して種々の問題となって現れて」おり、なかには国民性について考察し国民的自覚を呼び起こそうとする情熱に満ちている者もいる。「国民性」とか「自覚自信」といった言葉が「野にも山にも満ちて居るよう」なのであるが、このような国民性論は、「悪く言えば神經家が自分の脈拍を数えて居るよう」なのである。そして「思潮」欄は、日本人ほど自分の事を考えまたこれを語る国民が他にあるだろうか、という疑問を提示している。同じ欄で山路は、日本人の国民性についての議論が断片的証拠に基づいているため正当な根拠を欠き、それはあたかも「痴人の夢」のようであると批判している。⁴²⁾

山路は「我等は白人を以て優等なる人種なりとも思はざれども、さりとて我等のみが世界無比の善き人種なりとも思はず」と述べている。なぜなら「人間の価値は本来平等にして其勝劣は唯だ素養の如何に在りと信ずる」からなのであった。山路にとって日本帝国、若しくは日本人種という小さい範囲を限って「特別の哲学、感情、信仰をのみ養はんとする」のは「風と雲とに一定の区域を作らんとするよりも思かなる業」なのであった。このように彼は人間の普遍性を強調して、国民性論を批判したが、それだけに止どまっていなかった。井上哲次郎が「普遍的」理想宗教と「個別的」国民精神の両方を論じていたように、山路もまた「普遍的な」人間の心の問題だけでなく、日本国民が誇り得る伝統を日本の歴史の中に探求していたのである。

山路は、国家主義教育、国民性論を批判したが、人間の普遍性を信じるが故にすべての日本的なものを拒否してしまつたのではなかった。明治三〇年の「日本の歴史の於ける人権発達の痕跡」の中で山路は、「国体」という言葉に彼なりの意味を与えている。山路は、「頻りに国史国文の教育を奨励し」、それによって「日本に固有なる愛国心」や「日本に固有なる忠孝の情」を養うべきだと主張する教育家に強く反対した。山路によれば、日本の歴史は、むしろ日本人の祖先が自己の生存、自己の権利のために戦つた闘争史であり、政府に服従することが日本に固有なのではないことを示しているのである。日本に人権発達の痕跡などない主張する者は、「日本人民の歴史を侮辱する者」であり、「日本の国体を知らざる者」なのであった。

山路にとって日本の「国体」はまた自由寛容精神の源でもあった。明治三二年の「大日本祖国の歌」に、この山路の「国体」論を見ることが出来る。彼は「万物を吐呑し万情を陶冶し、化して一国の風教となすものは唯此自由寛容の精神に在るのみ」と考えた。山路によれば、もし異端思想が抹殺されたならば、その国家の思想は単調となり、精神は狭くなり、その文明は化石化してしまう。しかし歴史が示しているところによれば、日本国民は、諸文明の異種異様な主張を受け入れ、同化して来たのである。それ故自由寛容の精神は日本の「国体」であった。

山路の「国体」論は、忠君愛国の精神が日本に固有であるとして日本主義を唱えた井上哲次郎の主張とは全く異なっていた。明治三一年に、山路は流布している国体論、国粹保存主義、日本主義について次のように述べている。即ち、今日の教育界の者は、「しきりに国体という、然れども彼等は未だ日本の文明史を解せざるなり。彼等はしきりに日本主義と云う、然れども彼等は日本人の模型の何たる者なる乎を知らざるなり。彼等の所謂国粹保存主義、日本主義は空気の如き感情のみ。」この様に山路は、教育界で鼓吹されている国体論が実体のないものだとして批判しているが、それと同時に、「余は古しの日本と戦はんが為に來りたる者にあらず」とも述べている。彼は過去の日本は捨て去られるべきものではなく、むしろその中にこそ日本を「新日本に移らしむべき道」が示されていると考えたのである。「二千五百年間の日本歴史を通じて発達し來れる総ての善き者、総ての美しき者、総ての真なる者に対して余は甚深の敬意を表し、且之に愛着す」というのが彼の日本歴史を見る観点であった。

それから西欧の文明が「古しの日本」を亡ぼしてしまうかも知れないという危機に対して、山路は西欧の文明は「將に麻痺せんとする古しの日本を呼醒する者」であり、この意味で自分は「西欧の文明を日本に輸入せんとする者」なのだと述べている。

こうして、山路の《日本への回帰》は、日本を閉ざされたものとしてではなく、外に対して開かれた、変化し得るものとして把握することであった。そして、その様なものとしての日本の伝統こそ、日本人が世界に対して誇り得るものなのであった。山路の言葉によれば、過去の日本は「若し善く之を長養発達せば日本をして特殊の面目を世界に保たしむべき価値ある者」なのであった。この様な見方は、日本の「個別的な」特性のみを取り上げる井上のもう一つの《日本への回帰》にはなかつたのである。

五. 結 論

キャロル・グラックは、「日本の近代神話」(一九八五年)の中で、山路愛山が、日本の「国粹」の意味を定義しようとした民間の「ナシヨナリスト」の一人だったと指摘している。また、井上哲次郎については、教育勅語の「ナシヨナリズム」を擁護した学者として描いている。このような、山路と井上が「ナシヨナリスト」であったと言う解釈は、的外れではないとしても、本稿で論じたような彼等の思想上の根本的対立を説明することは出来ないであろう。

すでに検討したように、山路と井上はともに啓蒙思想がもたらした功利主義的物質主義的風潮に対する懷疑から自らの思想活動を開始した。彼らが問題としたのは、文明開化によって生じた精神的混

乱を如何に解決するかということであった。井上は伝統的宗教を超えた「普遍的な」理想的宗教を学問的に創造することが必要だと主張したのであるが、同時に彼は「個別的な」国家に奉仕することが人生の目的であるべきだとも主張した。「普遍的な」宗教と「個別的な」国家主義を同時に唱えたという点で井上の思想は二重構造を持っていた。これに対し山路は、井上の言う東西宗教の折衷的統合によって作られた宗教では、真に人間の心を満足させることは出来ないと考えた。また「人心は一つなり」という観点から、人生問題は普遍的問題であり、国家主義は救いとはならないと考えたのである。山路は、井上を「臨機応変者」と呼んで彼の思想の折衷性を見抜いていた。

井上の主張した国家主義は教育の場で唱えられ、忠君愛国の精神が日本の国体であると教えられたが、山路は日本主義を提唱した高山樗牛のような人物を生み出してしまった原因は、このような国家主義教育にあると考えた。この国家が至上のものであるという考えの背後には、日本国民特性論があり、井上は日本国民の特殊性を日本の歴史の中で証明しようとした。井上と師弟関係にあった高山の場合にも、同様な「歴史的研究」に対する関心が見られた。ただ高山の発想の根底には、井上に見られるような、日本を世界に結び付ける別の「普遍的」な観点がなく、彼は「国家的道徳を外にして別に人類的情誼なるもの」はないと考えた。つまり高山は、帝国大学の恩師井上の思想の「個別的」側面のみを受け継いだのである。

このように、現在未来の日本のあるべき姿を見つけるために「過去の日本」が振り返られたことが認められる。しかし山路が日本の

歴史の中に発見した日本の精神は、井上や高山が主張した忠孝精神とは全く違ったものであった。山路の思想には、日本を「世界の中の日本」としてとらえることの出来る普遍的原理があり、井上が抱えていたような思想の二重構造という問題はなかった。それとともに高山のように、「個別的な」日本的なものに自己の思想を閉じ込めてしまうこともなかったのである。こうして明治後期の知識人に見られた《日本への回帰》は、それぞれの道を辿っていたのであり、山路の《日本への回帰》は、「異中に同を見る」³⁴ことに他ならなかったのである。

註

- (1) 開国百年記念文化事業会編「明治文化史 第五巻 學術」(原書房、昭和五四年)、五三二、六四一頁。
- (2) 宮川透「日本精神史への序説」(紀伊国屋書店、一九七七年) 参照。
- (3) 色川大吉「明治精神史(下)」(講談社、昭和五一年)、一〇二九頁。
- (4) 山路愛山「英雄論」(「女学雑誌」第二四七号、明治三四年一月一日)。
- (5) 山路愛山「明治文学史」(「国民雑誌」明治二六年三月一九日、二六日)。
- (6) 同上、五月七日。
- (7) 山路愛山「近世物質的の進歩」(「国民之友」明治二五年)。
- (8) 山路愛山「世界の過去現在未来」(大江書房、大正六年)、二五〇～二五一頁。
- (9) 山路愛山「現代日本教会史論」(明治三九年)。
- (10) 山路愛山「生命哲学」(「独立評論」明治四一年六月三日)。
- (11) 山路愛山「日本の思想界に於ける帝国大学」(「太陽」明治四二年五月)。
- (12) 井上哲次郎「明治思想界の回顧」(昭和七年)。
- (13) 武田清子「近代科学摂取の三つの道」福沢諭吉、加藤弘之、植村正久を中心に「国際基督教大学教育研究」六、昭和三五年、四〇頁) 参照。
- (14) 磯野直秀「モリスその日その日」(有隣堂、昭和六二年) 参照。
- (15) 加藤弘之「博物学と歴史学」(「史学会雑誌」明治三三年五月)。
- (16) 井上「明治哲学界の回顧」、六〇頁。
- (17) 井上哲次郎「日本民族思潮の傾向」(「太陽」明治三二年、九二頁)。
- (18) 井上「日本民族思潮の傾向(承前)」(「太陽」明治三二年、一二一～一五頁)。
- (19) 山路愛山「田舎より首府に(第四信)」(「国民新聞」明治三三年四月二七日)。
- (20) 山路愛山「人生の話(六)」(「信濃毎日新聞」明治三四年六月二三日)。
- (21) 山路愛山「人生の話(四)」(「信濃毎日新聞」明治三四年六月二一日)。
- (22) 山路愛山「人生の話(五)」(「信濃毎日新聞」明治三四年六

月二二日)。

- (23) 山路愛山「発刊の趣意」(「独立評論」明治三十六年一月一日、一号、一頁)。
- (24) 「井上哲次郎氏の「宗教革新の前途」」(「独立評論」明治三十六年一月一日、一号、六一〜六二頁)。「井上哲次郎氏の「日本徳教論」」(「独立評論」明治三十六年二月一日、二号、六一〜六二頁)。山路愛山「海老名弾正氏の耶蘇基督伝を読む」(「独立評論」明治三十六年三月一日、三号、九、一二頁)。
- (25) 十川信介編「藤村文明論集」(岩波書店、一九八八年)、一九四〜一九五頁。
- (26) 山路愛山「文学及び思想」(「独立評論」明治三十九年二月三日、二号、二二頁)。
- (27) 井上「明治思想界の回顧」(昭和七年)。
- (28) 井上哲次郎「教育と宗教の衝突」(「教育時論」明治二十六年一月二日、二七九、二八〇、二八一、二八三頁)。
- (29) 山路愛山「井上哲二郎氏に与ふ」(「護教」明治二十六年四月一日、五日)。
- (30) 井上「青年の精神的危機」(「独立評論」明治三十六年、七号、一三〜二三頁)。
- (31) 山路「文学及び思想」(「独立評論」明治三十九年二月三日、二二〜二五頁)。
- (32) 山路愛山「教育論(上)」(「独立評論」明治三十九年七月三日、七号)。
- (33) 「文学及び思想」(「独立評論」明治三十九年二月三日、二二頁)。
- 井上哲次郎「明治思想界の回顧」(昭和七年)。
- (34) 「万報一覽」(「新公論」二四卷七号、明治四二年、二七頁)参照。
- (35) 井上哲次郎「内地雜居論」(明治三二年)(明治文化研究会編「明治文化全集 第一一卷 外交編」日本評論社、昭和三年、四七三〜四八八頁)。
- (36) 源了圓「教育勅語の国家主義的解釈」(坂田吉雄編「明治前半期のナショナリズム」未来社、昭和三年、一八二頁)。
- (37) 山路愛山「今猶古の如し、彼猶此の如し」(「国民新聞」明治二五年四月三日)。
- (38) 山路愛山「大同論」(「独立評論」明治三八年、五号、三五〜三九頁)。
- (39) 「日本人可解論」(「国民雑誌」大正元年一〇月一日、六〇〜六二頁)。
- (40) 山路愛山「史学論」(「国民新聞」明治三三年七月二〇日)。
- (41) 記者「日本古学派の哲学」(「独立評論」明治三六年、一号、七二〜八四頁)。
- (42) 「思潮」(「独立評論」明治四一年三月三日、一九〜二八頁)。
- (43) 山路愛山「尚武論」(「独立評論」大正二年二月一日、五、六頁)。
- (44) 山路愛山「露国及びトルストイ伯」(「独立評論」大正二年二月)。
- (45) 山路愛山「日本の歴史に於ける人権発達の痕跡」(「国民之友」三三〇〜三三二号、明治三〇年一月九日〜二三日)。

- (46) 山路愛山「大日本祖国の歌」〔信濃毎日新聞〕明治三二年四月二十九日。
- (47) 山路愛山「西園寺文相に与ふ」〔世界之日本〕二四号、明治三二年二月一日。
- (48) 同上
- (49) Carol Gluck, *Japan's Modern Myths* (Princeton: Princeton University Press, 1985), pp. 112, 133.
- (50) 山路愛山「現代日本教会史論」〔基督教評論〕警醒書店、明治三九年。
- (51) 同上。
- (52) 渡辺和靖「明治思想史」(ぺりかん社、昭和六〇年)二四五～二四六頁。
- (53) 宮川透「日本精神史への序説」(紀伊国屋書店、一九七七年)、三一頁。
- (54) 山路「戦国策とマキャベリを読む」〔国民之友〕明治三〇年九月一〇日。

(ウェリントン・ヴィクトリア大学助教授)